

子どもの居場所

まぐまぐ殿堂入り・日刊メールマガジン
「今日のフォーカスチェンジ」第2280号
(2010年1月25日発行)より

横浜市青葉区小中高生ミュージカルにかかわって、9年になります。ふり返って、いくつか思うことがあります。そのひとつに、ここには、子どもの居場所があるなあということです。

たとえば、休日稽古の日、何人かずつ集まって、お昼ごはんを食べているとき。けっして、そこにいるのが、同じ学年の子だけとはかぎらないのですね。中学生のなかに、小学生がまじっていたり、逆に、小学生のなかに、中学生がまじっていたり。おそらく、その子にとっては、同じ学年の子だけというよりも、話が合ったり、落ち着いたりするのでしょう。

でも、学校では、なかなか、そんなふうに、自由に異年齢の子どもたちが、自分の落ち着きどころを見つける機会はありません。部活という、異年齢の場はありますが、そこでは、おおくの場合、学年による上下関係が存在します。上下関係のあるところでは、安心して、ところをひらくことは、でき

ません。

子どものころというのは、けっして、ひとしなみに成長するわけではないのです。まだ、小学生なのに、びっくりするくらい、深い感受性をはたらかせる子もいます。そういう子は、ときには、おとなさえ発想しないような、表現を使ったりもしますが、同じ学年の子たちからは、「何を言っているのか、わからない」などと言われ、ひとり、浮いてしまうことがおおいのです。

本人は、自分の素直な気持ちを表現しているだけなのに、まわりには、受け入れてもらえない。そうすると、おかげさではなく、まさに、アイデンティティーがおびやかされるような状態になるのです。どこに、ころのよりどころを見つけていいかわからず、窒息するような気持ちにとらわれるのです。

でも、異年齢の場では、そんな問題は、あっという間に解消してしまいます。だって、年齢がいくつかあがるだけで、その子の発想や考えかたは、受け入れ可能な範囲になるのです。普通に「話が合う」状態になってしまえるのです。

逆の場合もそうです。ころがゆっくり成長していく子もいるのです。その子にとっては、同じ学年の子たちとは、どうも話が合わないのです。こうした子の場合も、異年齢の集団のなかでは、ちゃんと、仲間を見つけることができます。少し年下の子どもたちが、そういう子を、まるで問題なく受け入れます。仲間になるのに、年齢は関係ないのです。

まして、こうして、さまざまな学校や学年の子どもたちが集まる場では、上下関係は意味がありません。だって、高校生で初参加の子もいれば、小学生で、すでに数年、かかわっている子もいます。稽古の全体をまとめる役割は高校生がになっても、具体的な歌やダンスのグループリーダーは、体験のある子のほうが、向いていたりするわけです。どちらが上で、どちらが下という問題ではないのです。

そんな、居心地のいい関係が成り立っている場にいると、私自身までが、居心地のいい気持ちになるのです。だから、ついつい、稽古場に顔を出したくなるのです。できるかぎりのサポートもしたくなるのです。

舞台を観に来てくださったかたが、おっしゃいました。

「こんな場をもてる子どもたちは幸せですね」
ありがたく受け止めながらも、同時に、思うのです。もしもそんなふうに思ってもらえるのならば、どんなかたちでもいいから、それぞれの場で、そうした場を、つくってほしいと。それが、子どもたちよりもたまたま先に生まれた「おとな」の役割ではないのかと。

私自身も、これから、もっともっと、この活動をたしかかなものにしていきたい。そのことをとおして、よりたくさんひとと、思いをわかちあっていきたい。

子どもたちが、安心してところをひらき、伸び伸びと、自分を表現し、そして、ともに成長することのできる場が、日本じゅうのあちこちに、広まっていますように。

ころの底から願います。

●日刊メールマガジン「今日のフォーカスチェンジ」(かめおかゆみこ編集・発行)は、2003年11月1日創刊。2009年4月、2000号達成。3秒で読める携帯版もあり。無料講読は「かめわざ快心塾」から♪

<http://kamewaza.com/>